



第壹編

汽車の旅

家庭
教育

寶文館發行

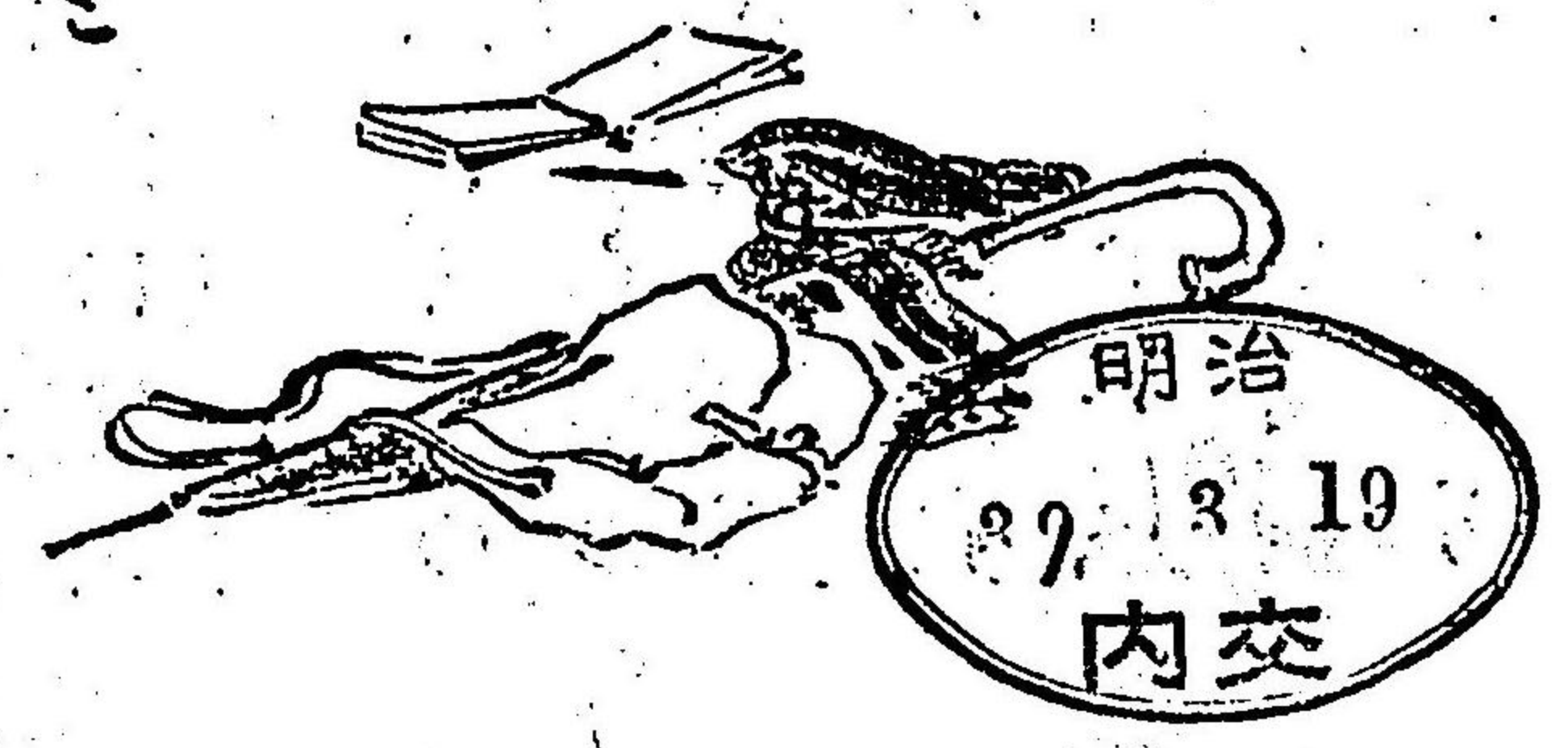
251
325



ここに おもしろい。夏
 のさいちーなどは、ずい
 ぶんおもしろい。

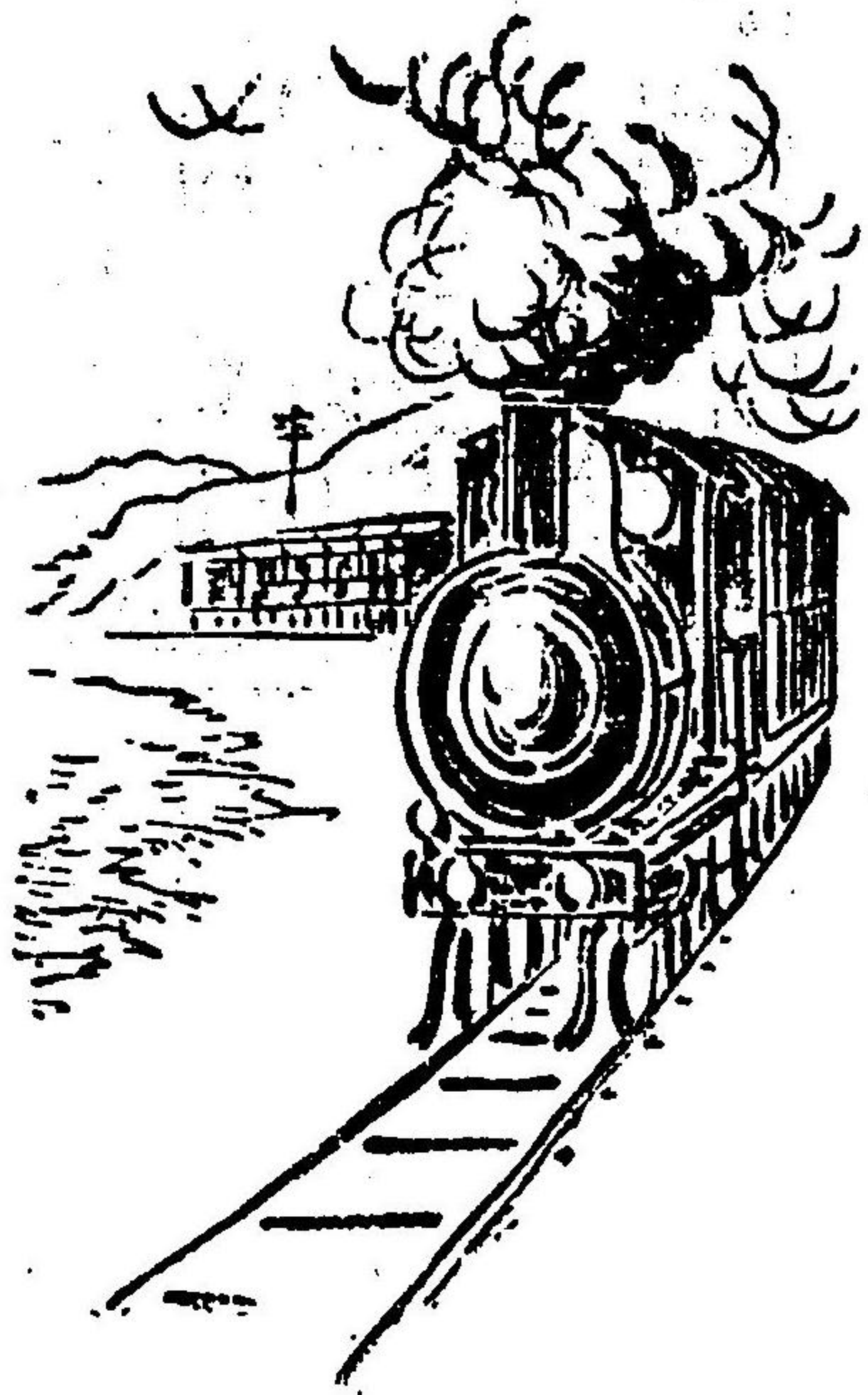
それものつてみれば、おもふたほどでもな
 く、まして、春のあたたかいころ、秋のすす
 しいじぶんは、山のけしきも海のがめも
 一入で、しばらくのままも、同じころにじつこ
 してぬないから、けしきはかほるいぼして、
 少しも、たいくつをせぬのみか、すすむことも、ま
 ことにはやくて、十里二十里の道は、またたくひまに行

はしがき



明治
 27 3 19
 内交

きつくことができるところから、用をたつすることもはやく、又三里五里の間には、必ステーションがあつて、のりおりがじゆうであるから、ゆるゆるの名所を見ることもでき、舊蹟をたづねるところも心安うできる。我が日本には、鐵道もたくさんあり、けしきのよいところも多く、名所舊蹟もおびただしいから、汽車の旅のたのしみは、よその國々よりも、又かくべつに多い。この書は、全國鐵道近べんの地理、歴史のおもなるもの、または、名所舊蹟の名高いものを、わざわざ、汽車にのり



を、わざわざ、汽車にのり

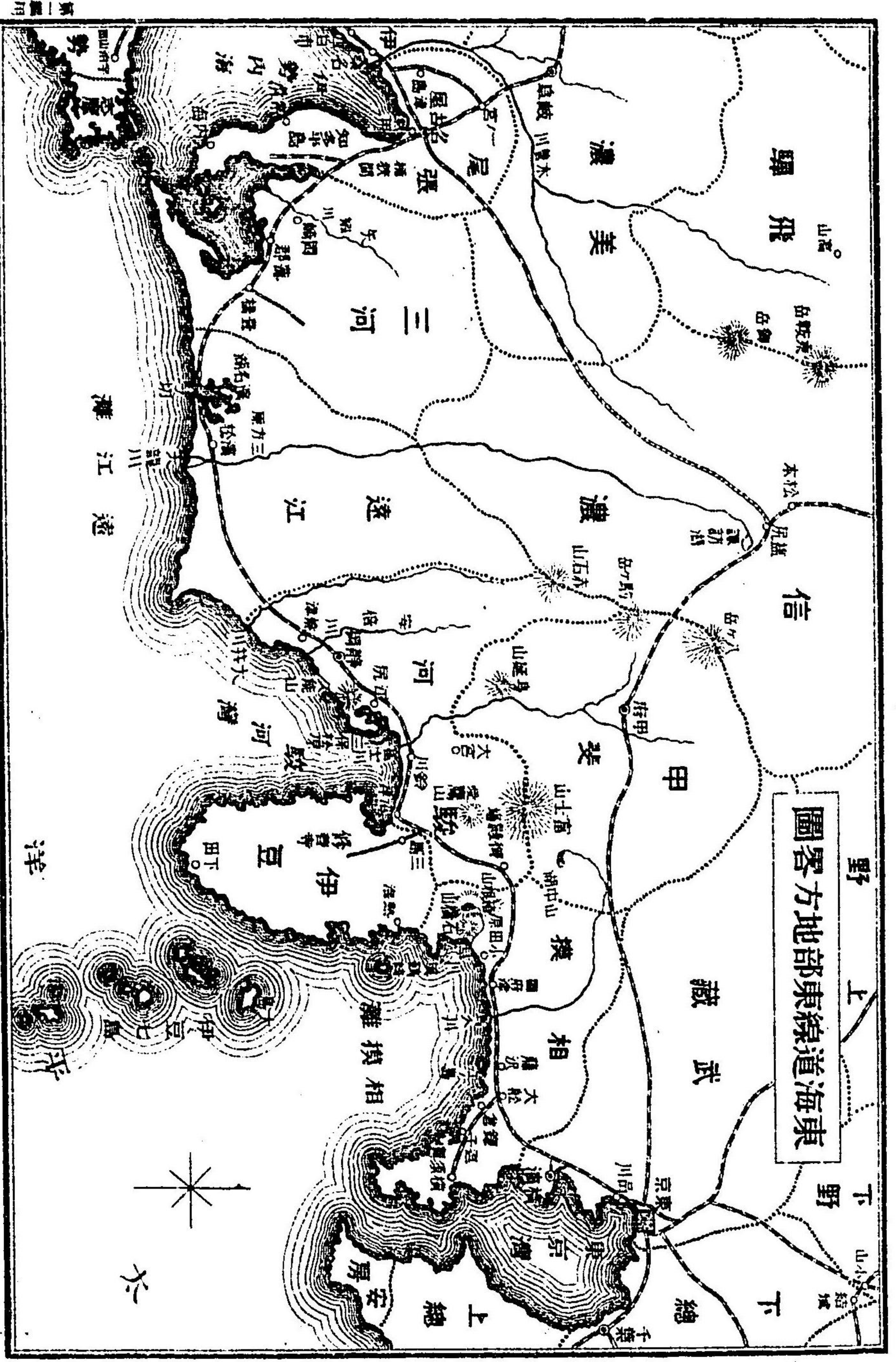
て實地を取しらへ、兒童諸君のために、わかりやすいやう、書をたくさん加へ、地圖をもそへて、愉快に、また、確實に、読み得らるるやう、工夫をこらしたつもりである。どうか、兒童諸君も、汽車にのつたつもりで、著者と一緒に、旅行したまはんことを、ひこへに希望いたします。

明治三十九年三月

著者しるす

目 録

一	東 京	一	頁
二	新 橋 出 立	三	頁
三	鎌 倉 江 島	七	頁
四	箱 根 山	十三	頁
五	富 士 山	十八	頁
六	富 士 湖	二十七	頁
七	靜 岡 川	二十九	頁
八	濱 名 古 屋	三十四	頁
九	名 古 屋	三十七	頁



第一圖用



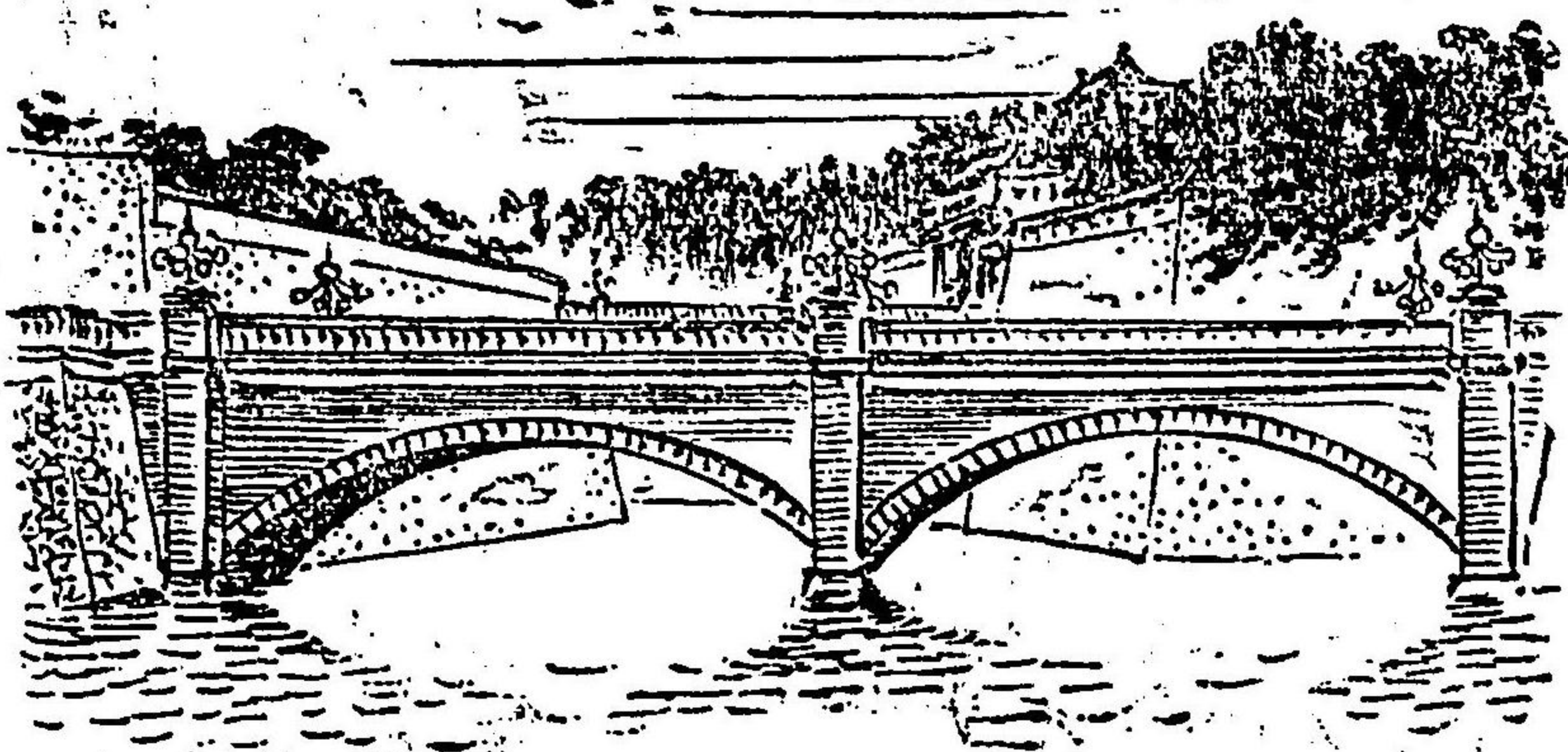
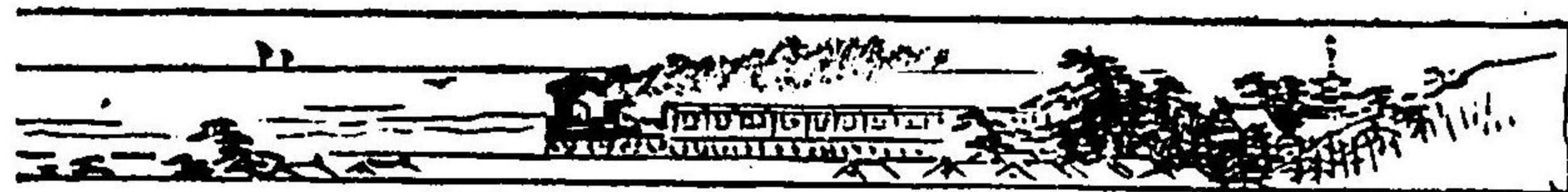
第一編

清水貞雄 著

東京

東海道線の部 その一

東京は我が國の首府で、戸數も一ばん多く、人口も第一ばんで、二百萬人ほどある。この地は、もと江戸といつたが、明治維新、王政復古して、天皇陛下は、ここにおすまひあそばすことになり、江戸を東京とあらためたまひ、おもなる役所も皆、ここにおかせられてから、ますますは、んじ、して、世界中で、二番か三番かといはれるほどの



二

大きな都會となったのである。宮城は、周圍二里ほどあって、御正門二重橋は、まここに、たふといおかまへである。靖國神社には、國家のために、忠死した人のたましひが、まつられてあり、毎年五月に、りっぱなおまつりがある。この地には、學校もたくさんあり、師團もあり、種々の製造所、會社などもあり、名所もおびただしく、商業もすこぶる盛であって、

鐵道も四方八方へ通じてゐる。東京の案内は、おつて、ゆるゆるするここにして、まづ西に向ひ、新橋を出立して、東海道線により、關西地方へ行くここせう。

二。新橋出立

新橋は、東海道線の第一驛で、ここ、上野驛とは、東京のおもなる出入口である。新橋の次は、品川驛であるが、汽笛一聲、出たかと思ふまには、やつい



た。左は品川灣で、徳川氏の末に築いた砲臺の臺場が、六つばかりならんでゐる。淺草海苔は、この灣ででき

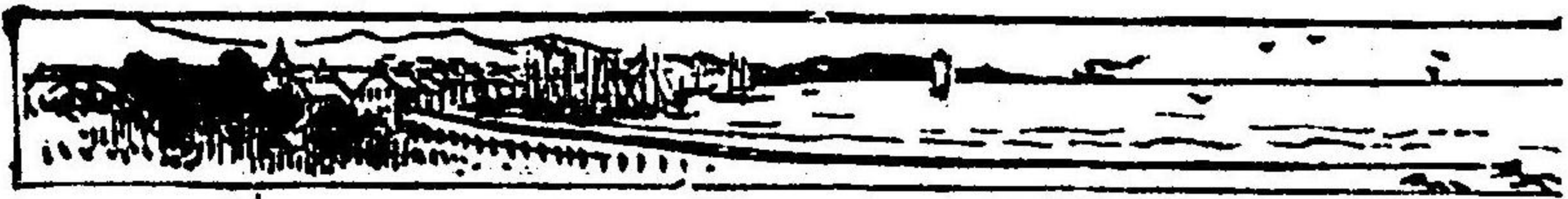
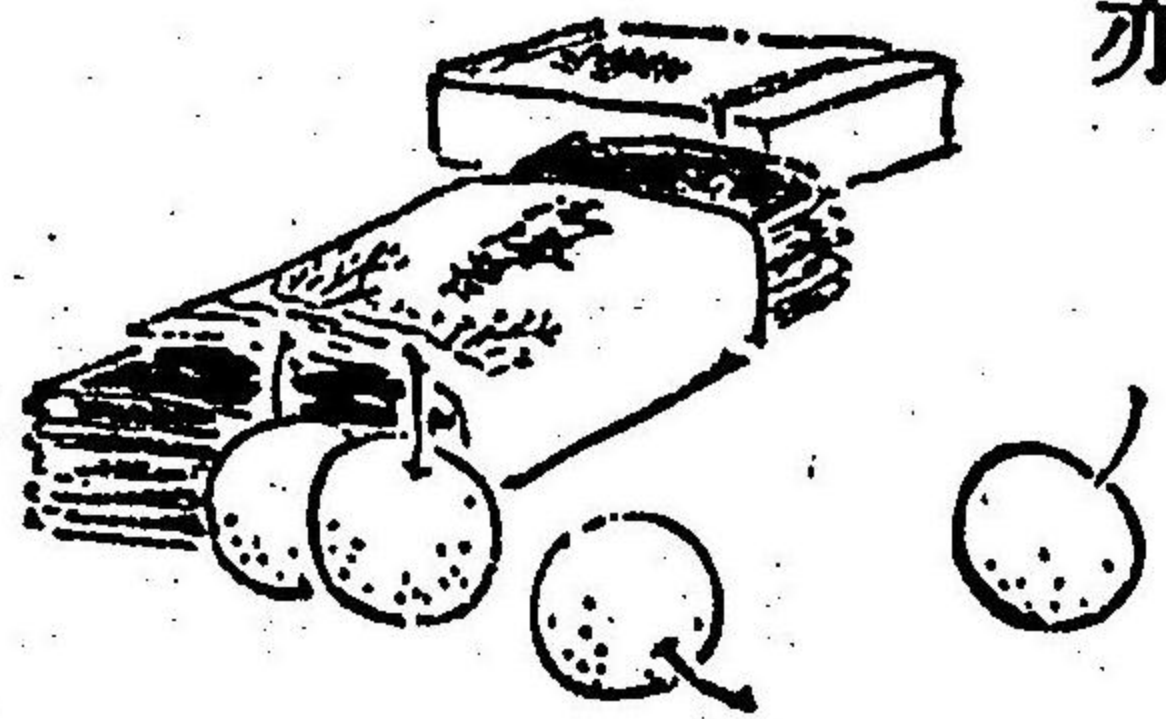
るので東京の名産となつてゐる。忠臣藏で名高い泉岳寺は、線路の右にあつて、そこには、赤穂城主淺野長矩と、四十七士この墓があ

り、今に、参詣人のたえまがなく、いつも線香の煙がたつてゐる。品川驛からは、

東京の西まはりへ通じてゐる汽車があるが、のりかへずにすすむと、大森驛

につく。この驛の西に、六郷川といふ川があるが、この川は、多摩川ともいって、川の近べんには、

梨畑がたくさんあつて、名産となつてゐる。又、川の上流に



矢口渡といふがある。そこは、南朝の忠臣、新田義興が、足利にたばかられ、舟から溺れて死んだ所で、世に名高い。大森から、川崎、鶴見、神奈川へ行けば、汽車は、やがて、横濱につく。ここは、有名な貿易港で、人口三十四五萬あり。港内には、内外の汽船が、いつもたくさん碇泊してゐ、小船もおびただしく居つて、非常に賑うてゐる。町には、又、りっぱな

建物^{たけもの}がたちならんでゐて、外國人^{がいこくじん}の居留^{きゅうりゅう}地^ちもあり、貿易^{たいぎ}の盛^{さか}なところは、實^{じつ}に、東洋^{とうやう}第一^{だいいち}である。今は實^{じつ}に、東洋^{とうやう}一^{いち}こもいはれてゐるが、四五十年前^{よんごぜんねんまえ}までは、ごくつまらぬ田舎^{いんさ}で、りーしの家^{いえ}が、わづかばかりあつた位^{くらい}なのが、港^{みなと}がよいため、しばらくのまにかやうに、開^{ひら}けたので、攝津^{せっしん}の神戸^{かふべ}も、ここも同様^{どうがう}である。この港^{みなと}の南^{みなみ}に、本牧^{ほんぼく}岬^{さき}が突き出て、岬^{さき}の南^{みなみ}には、根岸^{ねがし}の競馬^{けいば}場^ばが、その又^{また}南^{みなみ}には、杉田^{すぎのた}の梅林^{ばいりん}があつて、いづれも有名^{ゆうめい}なものである。横濱^{よこはま}をたち、程谷^{ほどや}戸塚^{とづか}を経て、大船^{おほぶね}につく。東京^{とうきょう}は關

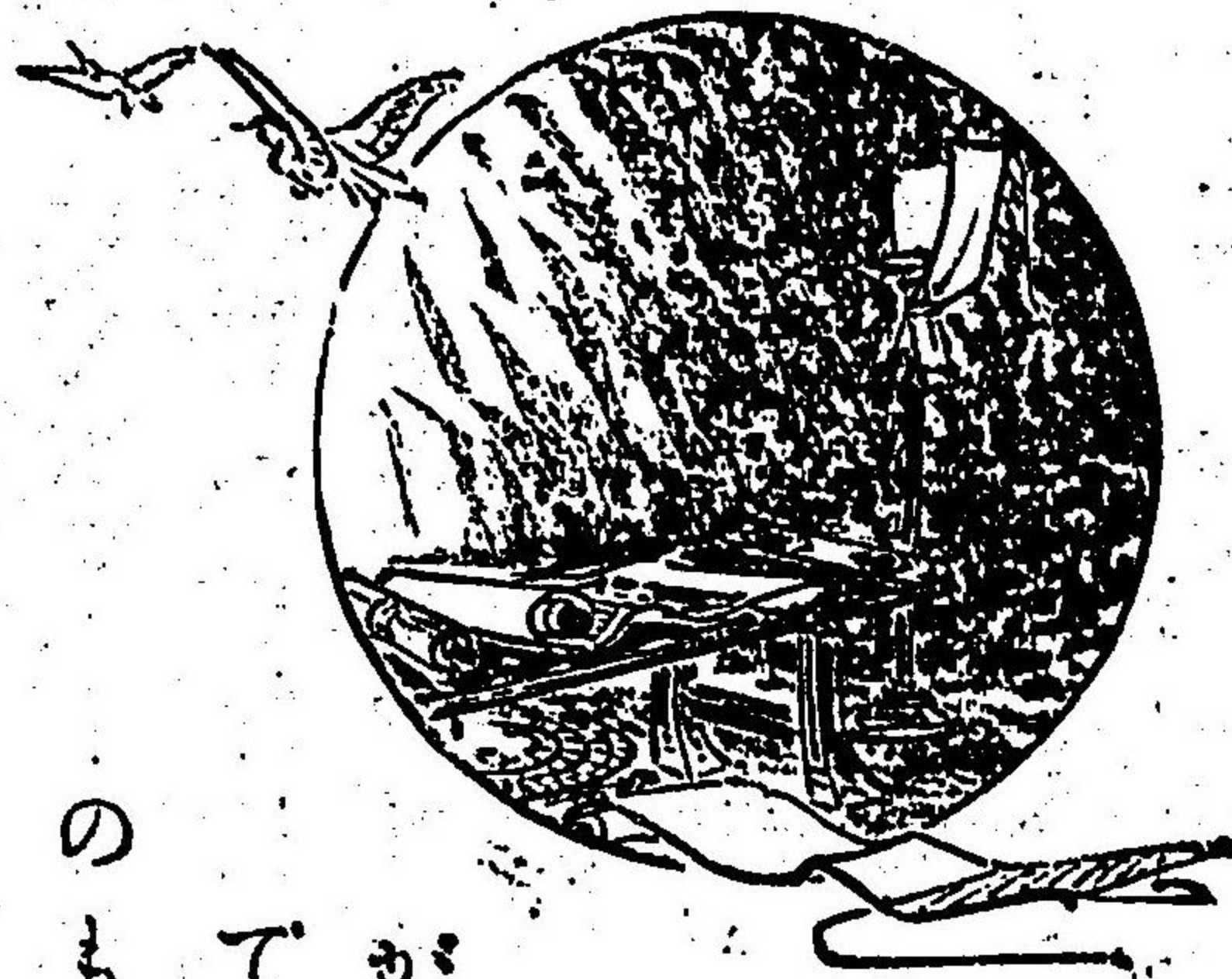


東平野^{とうへいの}の内^{うち}にあつて、東西南北^{とうせいなんぺい}、いづれを見ても、山^{やま}こいふものは、一つも見^みえぬが、神奈川^{かんながは}あたりで、山^{やま}に近づ^かき、程谷^{ほどや}戸塚^{とづか}あたりより、益^{えき}多^{おほく}くなつて、平野^{へいの}は、かへつてあるかないかである。さて、大船^{おほぶね}は、小驛^{せうえき}であるが、横須賀^{よこすか}への線^{せん}は、ここでわかれるのであるから、のりおりする人^{ひと}は、中々^{なかなか}に多い。ついでであるから、ここで乗^{のり}かへ、鎌倉^{かまくら}返^{かへ}子^こ、横須賀^{よこすか}の方^{かた}をすませ、江島^{えじま}をも見物^{けんぶつ}して、大船^{おほぶね}のつぎの藤澤^{ふじさわ}驛^{えき}につき、そこから西^{にし}に進^{すす}むこここせう。

三。鎌倉江島

東洋通商の部 三。鎌倉江島

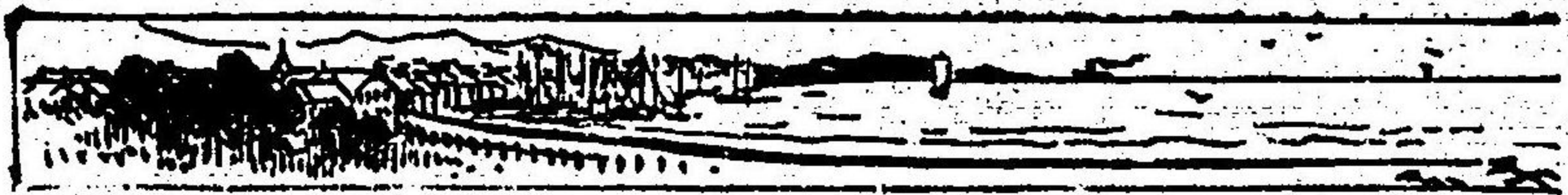




前でのこととて、公曉がかくれて
をたさいふ銀杏の木は、今に残
てゐる。護良親王のこらはれ



鎌倉は源頼朝がここに役所を
おいてから、北條氏につづいて
およそ百五十年間、政治をこつて
居たところであるから、舊蹟が
實に多い。鶴岡八幡宮は源氏
が特別に信仰して居た神さま
で、實朝が公曉に殺された
のも、又、静が舞をまふ
たのも、皆この神



てござつた土牢も、今にあり、そ
のまへに、鎌倉宮といふ社があつ
て、親王をおまつりもうしてある。
寺には、圓覺寺、建長寺など有名なの
がたくさんあり、川には、かの青砥藤
綱が、わづかの錢をひろふために、たく
さんの錢をつかつて、松明をかひ、人夫をや
こふたさいふ滑川一つあるばかりであ
る。ここの海濱は、由比濱といつて、水清く景
もよく、新田義貞が北條を攻めるこきに、太刀
をなげ入れて、海水をひかせたさいふ、稻村が
崎は、濱の西に突き出てゐる。鎌倉にも、返子にも、



海水浴場があつて、夏は非常に賑ひ、逗子には御用邸が設けられて、寒さの折からなどには、皇后陛下、皇太子殿下などが御逗留あそばすところがある。横須賀には、我が國最初の鎮守府があり、造船廠などもある。兵廠造船廠などもあつて、軍艦水雷艇などが、いつも碇泊してゐる。鎌倉にもどり、大佛をも見、稻村が崎から海濱をつたうて、西に行くと、そこは七里濱で、海の景色すこぶるよく、濱の西に名高き江島がある。江島からは、富士の山も見え、海の景色もよく、魚類も新しく、宿屋もたくさんあり、貝細工



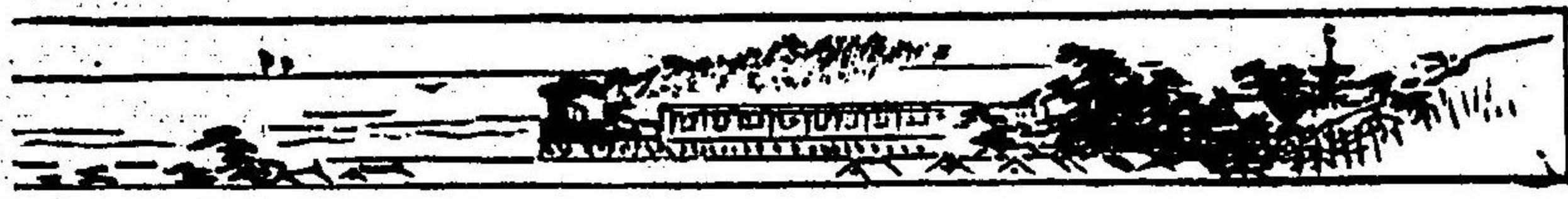
などもあきなつてゐて、遊ぶによいところであるから、四時見物人がたえぬ。江島の北、一里ばかりに、東海道線の藤澤驛があり、今は遊覧の便に、鎌倉から七里濱をつたつて、この驛まで、電気鐵道があるから、このあたりの見物は、ますます便利である。さて、藤澤をたつて、馬入川をわたり、大磯、國府津と行く。大磯は海岸で、大磯は海水浴でここに名高い。國府津からは、汽車は海岸をはなれ、酒匂川にそつて山に入り、箱



根のトンネルをあまたぐり、御殿場から沼津に出る

が、國府津で汽車をおり、街道を西に行き、小田原を通り、箱根に出で、國府津から箱根まで、電氣鐵道が通じてゐる。天下の峻きもいはるる峠をこえても、同じく沼津に出る。この道は、昔の東海道で、箱根山には、湖水もあり、温泉もあつて、名高いところであるから、しばらく汽車をすてて、この方のここを歩いて見やう。

四。箱根

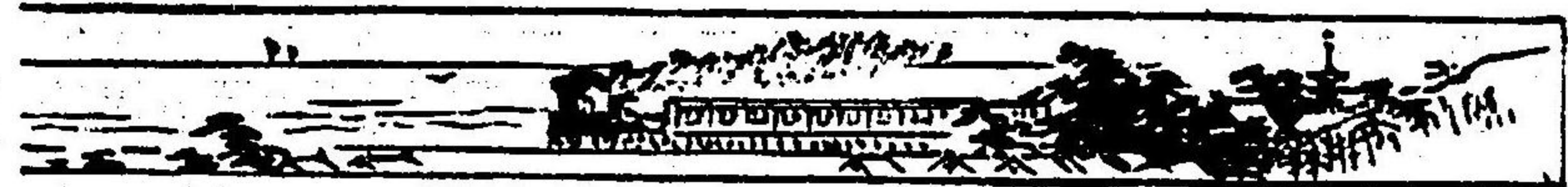


小田原には、二宮尊徳の社がある。豊臣秀吉が攻めあぐんだ北條

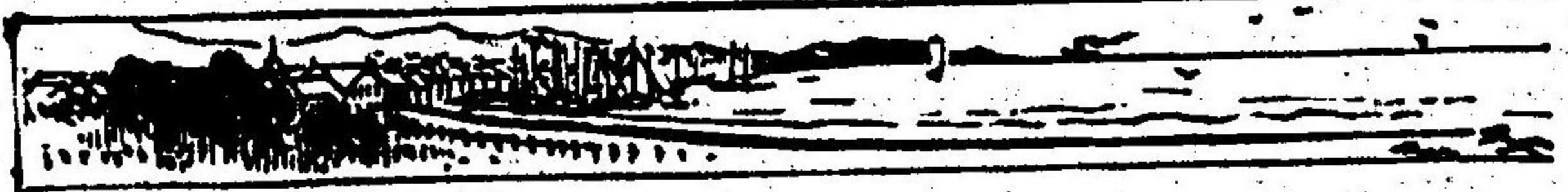


氏の城は、この城で、今はこりこぼたれて、石垣ばかり残つてゐる。頼朝が旗をあげて平家と戦ひ、まけて逃げかくれたといふ石橋山は、箱根への道の左手にある。その時、頼朝は、平家の軍に追はれて仕方なく、大木の根元の朽穴にはいり、息をこらしてかくれし、のび、やうやうに、助かったのである。頼朝の伏木がくれといふは、このことをいだったので、そ

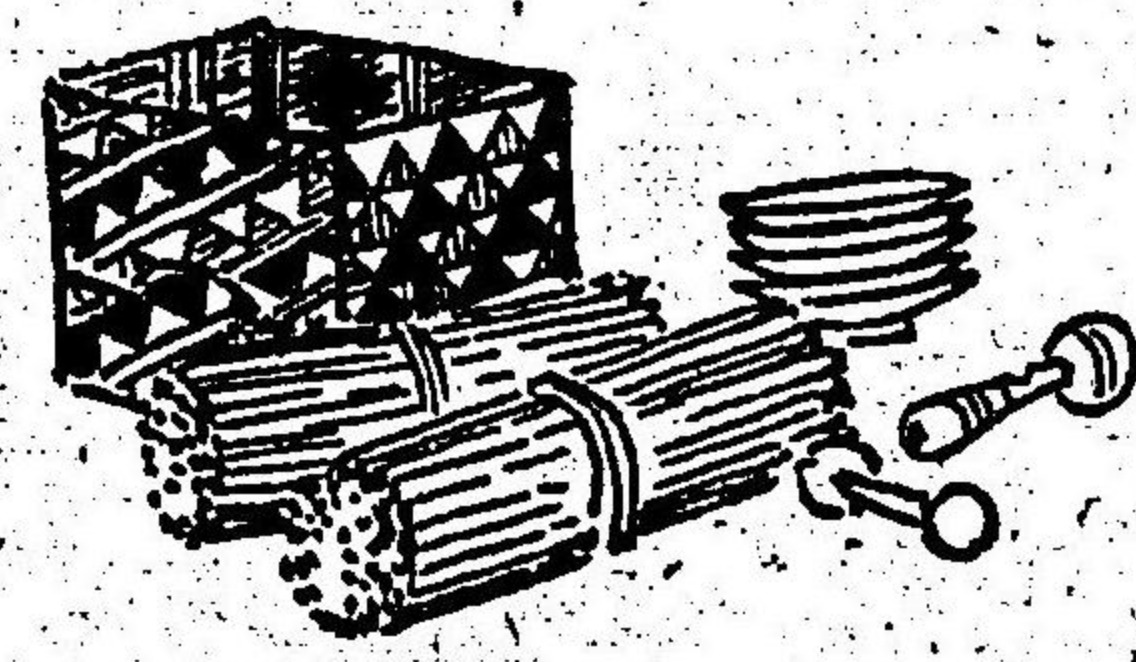
の後、七騎落こいて、主従七人舟にのつて逃

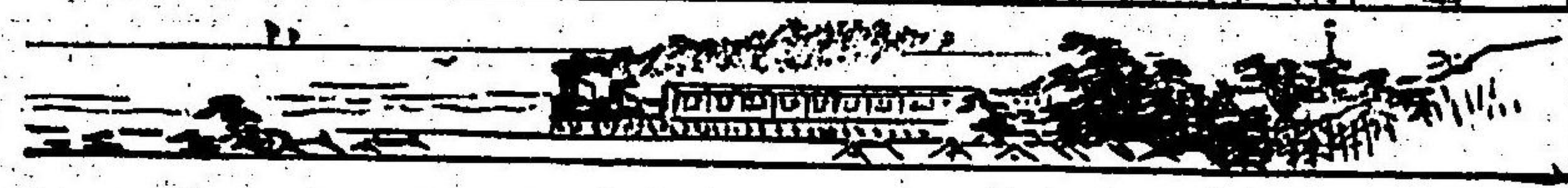


げ出した真鶴崎は、
山の手前はるか左
に見えてゐる。真
鶴崎のむかふには、
熱海温泉があり海
上遠くには大島が
煙をはいてゐる。
箱根山には温泉が
たくさんある。こ
の山はもと火山で
あつたので、頂上の蘆

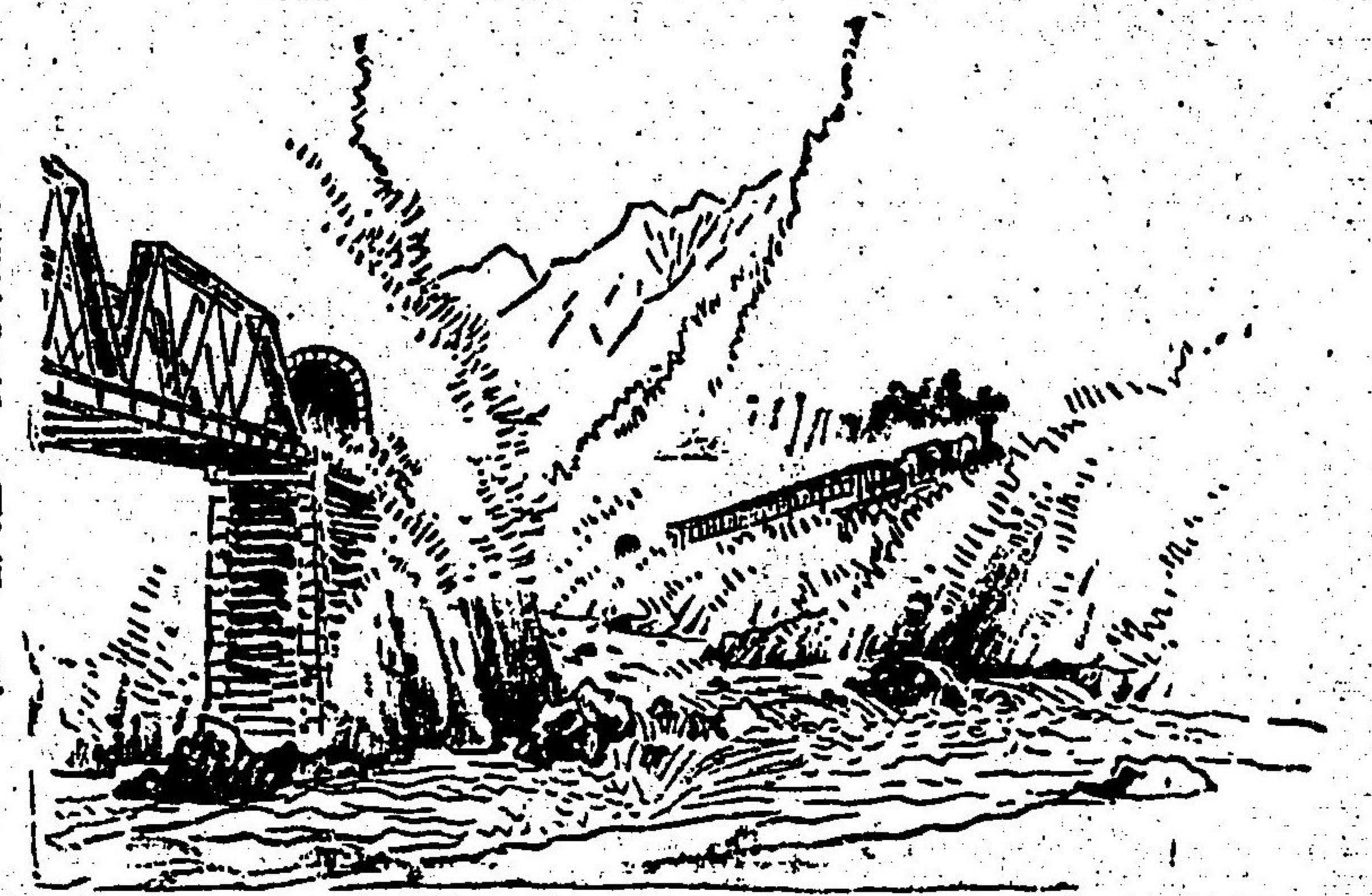


の湖は、火をふき出した穴であるといふことである。
大地獄、小地獄などいって、今に土中からあつた湯をふき
出してゐるところもある。蘆の湖はず
いふんけしきのよいところで、晴天風な
き折には、逆富士といつて、富士のかけがさ
かさまにうつるこころがある。箱根の關
所といつて、往來の人を取しらべたこころ
は、この湖水のほそりて、そのまへの湖に
つき出た小山の上には、箱根の離宮があ
る。箱根の山は、七つ八つの山の總名で、
東海道筋にあたる東半には、晝も暗きまで、杉の大木
が生え茂つてをり、西半には、笹が一ばい生えてゐる。こ





の笹は箱根笹といつて、筆の軸などをこしらへる。温泉は山の東手にあつて、湖尻の早川にそつてゐる。夏は極めてすずしく、空気も水も清いので、東京あたりから避暑がてら、遊びに来る人が多い。寄木細工と挽物細工とは、ここの産物で世に名高い。この山を西に下り、三島といふところにいづれば、豆相鐵道が通つてゐて、伊豆の南への便利がある。頼朝が平家に流された蛭小島は、ちよどこの道鐵のかたはらにあり、頼朝の子頼家が、をしこめられた修善寺は、同じくこの鐵道の南端近くにゐる。修善寺には、また温泉があつて、世に知られてゐる。此の地方に温泉の多いのは、元來、温泉は、地中に熱があつて、水があつくなり、地上にもれ出たもので、火山の多い



箱根の風景

ところには、温泉もしたかつて多いものである。我が日本には、火山が多く、ちよどこのへんは、火山の筋の通つてゐるところであるからである。さて、又、地圖をあけて見ると、相模伊豆地方には、梶原、三浦、北條、土肥、伊東など、源氏時代の武士の名が見えるが、これは、皆その生れた地名を苗字にしたもので、苗字でその生れ出たところを知ることが

できる。

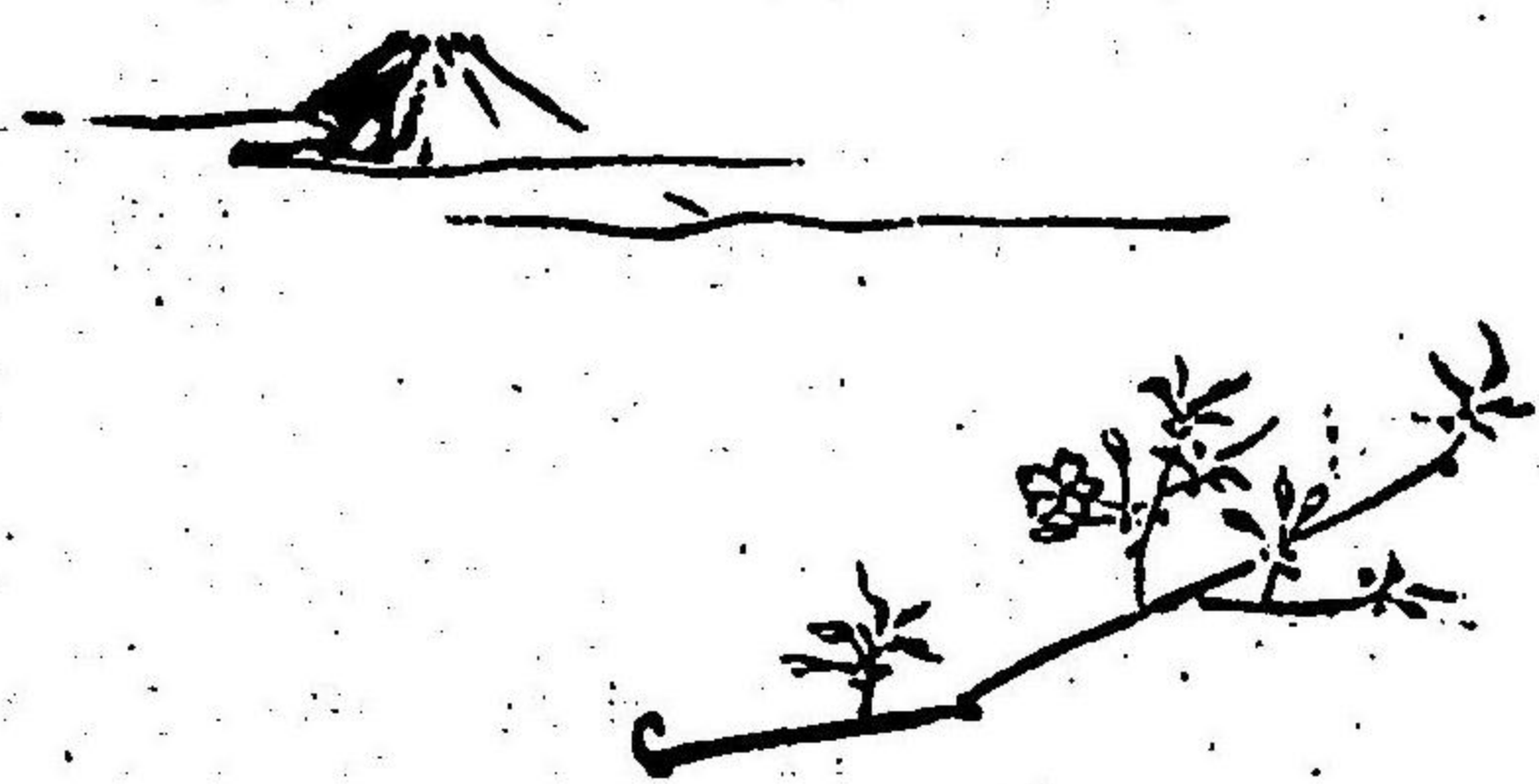
五。富士山

國府津に立ちもどり、汽車にて行けば、土地は次第に高くなり、酒匂川にそひて、山と山との間を行くのであるから、トンネルがたくさんあり、川をも再々渡るころになつてゐて、目さきがかはり、一寸珍らしいが、トンネルが多いので、かへつて、うるさう思ふころもある。御殿場は、富士に一ばん近い驛で、便利もよいから、富士に上る人は、大抵、ここでおろる。富士は、實に、

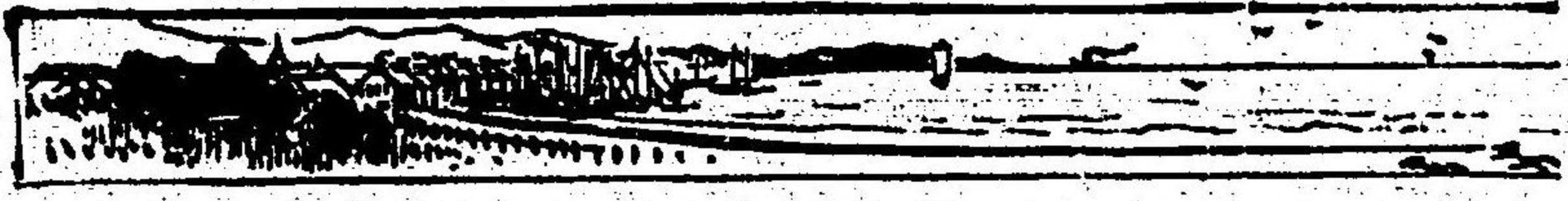


日本一の名山で、畫にもかき、詩にも作り、歌にもよみ、外國人までもしきりにほめてゐる。この山は、冬は上ることにはむつかしいが、夏はてがる上ることかでき、ことに近ごろは、ますます便利になつて、女も、子供も、年々、たくさん登山する。昔の何とやらいふ人は、日本に生れて、この山と、吉野の花とを見ぬ人は、日本人でないといふが、今日では、この山に上らぬ人は、日本人でないといふは、ぬばかりになつてゐる。

富士山に上る道は、五つあつて、麓から頂上までを一合目、二合目と名をつけて、十合目までの十にわりつけ、一合目毎に石室があつて、休息をさせ、又、宿泊をもさせてくれる。その麓といふのが、山全體からいふと、腹のころ



あたりであるから、御殿場驛からにしても麓まで五里ばかりあり、麓から頂上まで又五里ばかりある。都合十里の上り道を行くに、人によつてちがひもするが、まづ十二三時間はかかる。二合目あたりまで馬で行く人もあり、中には頂上まで駕籠で行く人もあるが、大ていは、わらちきよはんで身をかため、金剛杖をついて歩み上るのである。一萬二千尺からの高い山であるから、夏のまさかりでも頂上には雪があり、氷もはてぬ、空気もうすくなつて、よほど寒い。それで強力さうして、荷物を背負ひ、案内をも

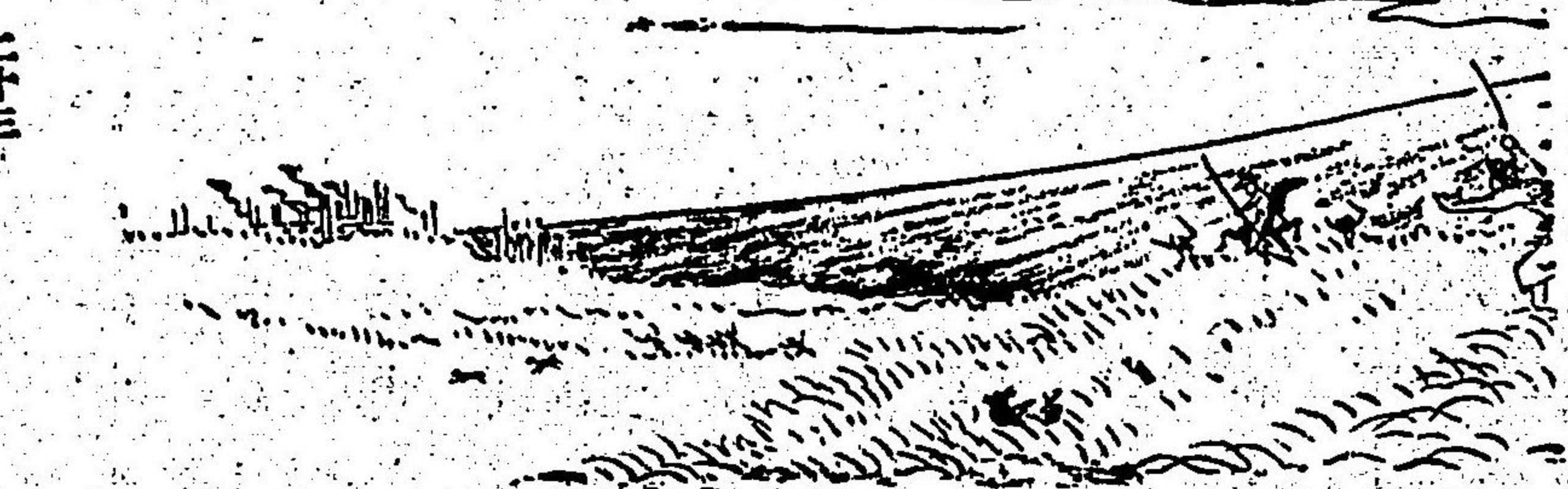


してくれるところの人夫をやこひ、それに襦袢をもたせていて、山の上では、これを着るのがふつうであるが、頂上では、それでもまだ寒く、石室には、炬燵をこしらへ、たえずたき火もしてある。米も、空気がうすいから、十分にはたけず、水も頂上では、金明水、銀明水といつて、二つの井があつて、不自由はないが、途中では、よほど不自由である。富士山は、今こそ静かな山であるが、昔は、たえず煙をふき出し、折々は、大爆裂があつて、土石を高く天になげ上げ、それは、それは、すさまじい勢であつたのである。なげ上げた土石は、十里、二十里の遠方まで散亂して、今におびただしい残つてぬ、頂上には、大きな穴が残つてゐる。穴のまはりはおどろくばかりの岩で、その岩のそこま

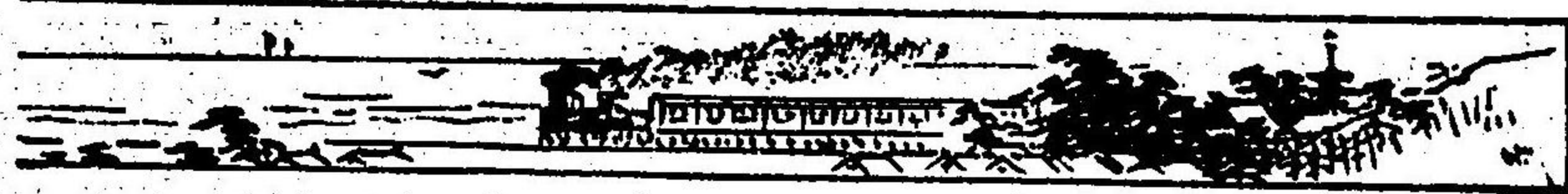
はりに、劔ノ峯、駒岳、白山岳などの八つ
の山がある。富士の頂上が鋸の齒のや
うに見えるのは、この山があるからで
ある。その山のすそには、今もなほ、ホ
コホコと暖いところがあつて、その土
をほり、鶏の卵を埋めておく。三十分
足らずで、煮ぬきができる。これは土中
に熱があるもので、またまた、爆裂するこ
とがないともかぎらぬ。劔ノ峯は、八
つの山の中で、一ばん高い山で、この山
に氣象の観測所が設けられてある。
この観測所は、十年ほどまへに、野中至



さいふ人が、苦心してこしらへたので、
自、ここに立てこもり、冬の観測をはじ
めたが、不幸にして病氣にかかり、半途
で下山した。頂上からの眺望は、廣く
大きいもので、高いと見た箱根山など
は、小さなこぶのやうに見え、富士川の
流れも、ぬひもの針をならべたやうな
氣持がする。信濃、甲斐の山々は、皆目
の下に見え、天氣のよき折には、加賀の
白山、越中の立山なども見える。日の
出のけしきは、りっぱなもので、傘ほどの
大きさのものが、のっこあらはれ、色も、赤

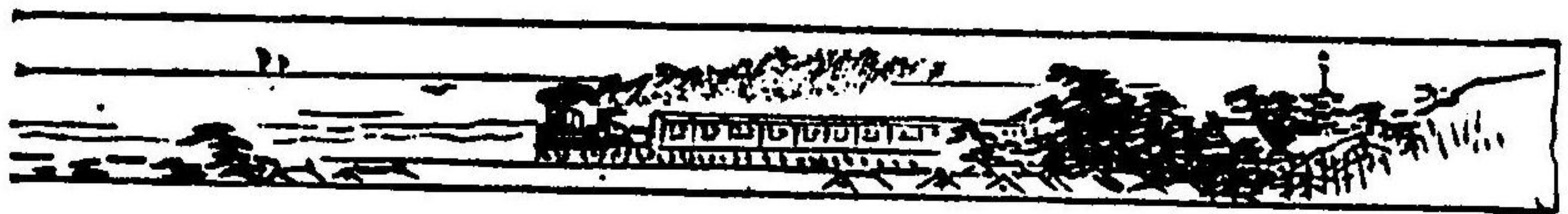


紫黄などさまざまにかはつて、實にうるはしいものである。日が上るにつれて、富士の影が雲の上、又は地の上、にうつることもあり、高山のことであるから、雲が脚下、一面にたなびいて、何物も見えず、雷を下にきくこともある。なににしても、高山には、案外のことがある、知識を得ることも多く、氣も快活になつて、身體のためにもなるから、男子はつとめて上つて見るが、よく富士は、また格別の山であるから、一度は、ぜひ上つてほしいものである。富士は、高く、大きい山で、山の裾が四方へひろがっている。富士の裾野といふは、このひろがるのことで、中に、森もあれば、林もあり、村もあれば、畑もあるが、大方は、草ぼり、ぼり、こぼれた野原である。昔、源頼朝が、ここで狩をし



て、猪、猿のたぐひをとり、大に武を錬つたところがある、その時、曾我の十郎、五郎といふ二人の兄弟が、親の仇、工藤祐経をうちこつて、名をあげたところは、大ていの人には知つてゐる。御殿場も裾野のうちで、汽車はここから沼津へ下り、一方となり、沼津からは、西にをれて、海岸近く走り、たえず富士のながめがある。田子の浦は、このあたりで、海岸の松は姿おもしろく、富士の前には、愛鷹山がそびえ、愛鷹山の裾には、

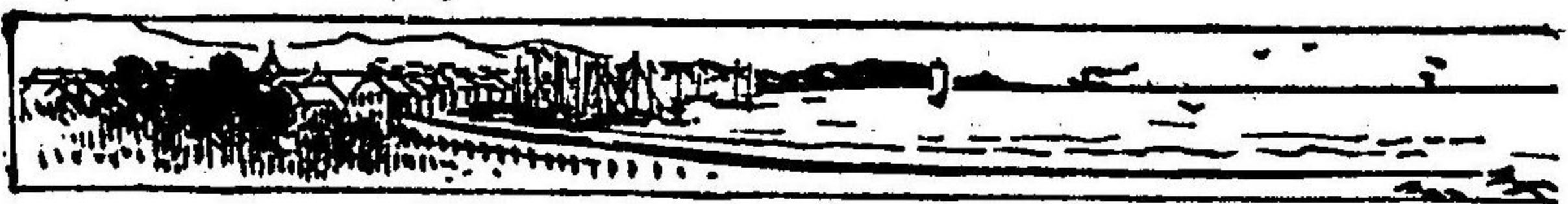




東海道の部 六。富士川

浮島沼がある。沼津驛の次が原驛、原驛の次が鈴川驛で、關西よりは富士に上るに、ここで下車し、吉原を通り越し、大宮に出て、そこで登山の用意をし、大宮口から上る人が多い。大宮には官幣大社淺間神社があり、この社の奥院といふが、富士山の頂上にある。有名なる富士製紙會社も、この大宮にあって、盛に紙を製造してゐる。

六。富士川



東海道の部 六。富士川

鈴川の次が岩淵驛で、驛の東に富士川があり、北甲斐國から流れきて、ここで駿河灣にそそいでゐる。我が國三急流の一つで、川も長く、流れもはやく、眺めもよいから、わざわざ舟をやらうて、下る人もある。日蓮宗の總本山身延山は、川の中ほど西岸近くにあつて、参詣者がたえぬ。頼朝が、伊豆で旗をあげ、石橋山でやぶれ、眞鶴崎から逃げ出して後、またまた兵をあつめて、平家に敵對したときに、平家は、平重盛の子、維盛に兵隊をつ



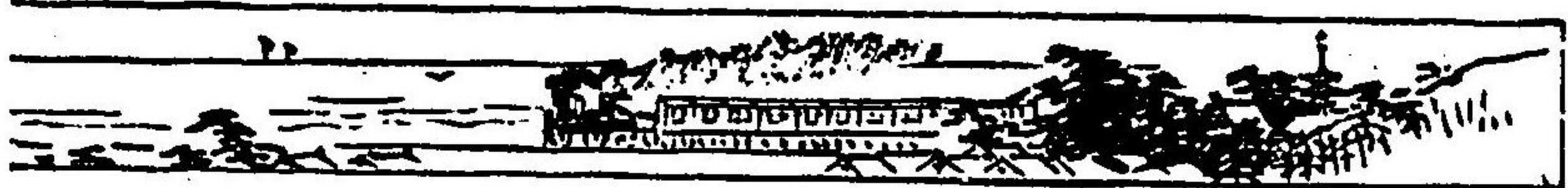
れて、頼朝をうたせた。さて、維盛がやうやう岩淵あたりまで進んできたときに、頼朝は、また、鈴川あたりまで進んできて、ちうど富士川の中には、さんて、源氏と平家とが陣取をするここになった。源氏は白旗、平家は赤旗、白と赤この旗が、廣い川の両方にかずかぎりなく、ヒラヒラとしてゐるさまは、すいぶんりっぱであつた。川には、橋がないから、相手を攻めるには、どちらからか川をわたらねばならぬ、白がさきにわたるか、赤がわたるか、互に考ながらにらみあつてゐた。すると、或夜のここ、この川にすんでゐる、たくさんの水禽が、ものにおどろき、羽音をたてて、一時にこびたつた。その音をききつけて、平家は、大びくり、そり、こそ源氏が攻めよせてきた、にげよにげ

よこ大そーどー、はだかに鎧をきるやら、かぶさをさかさまにかぶるやら、尻むきに馬にのつて、馬の首がないにおどろき、弓の絃を木の枝にひかけて、進むことができず、敵にさらへられたと早合點して、腹きるもあり、それはそれは、大へんなさわぎで、我れ一に、西をむいて逃げ出した。そして、かんじんの相手の源氏のほしでは、なんにもしらず、夜があけて、はじめて氣がつき、たたかはずに勝つた。

七。 静岡

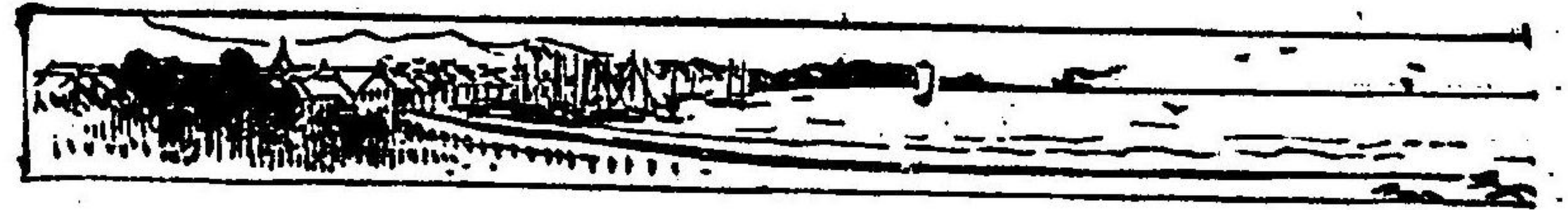
岩淵から西しばらくは、汽車は、全く、海岸を行く。けしきよほどよい。薩埵のトンネルあたりになれば、富士



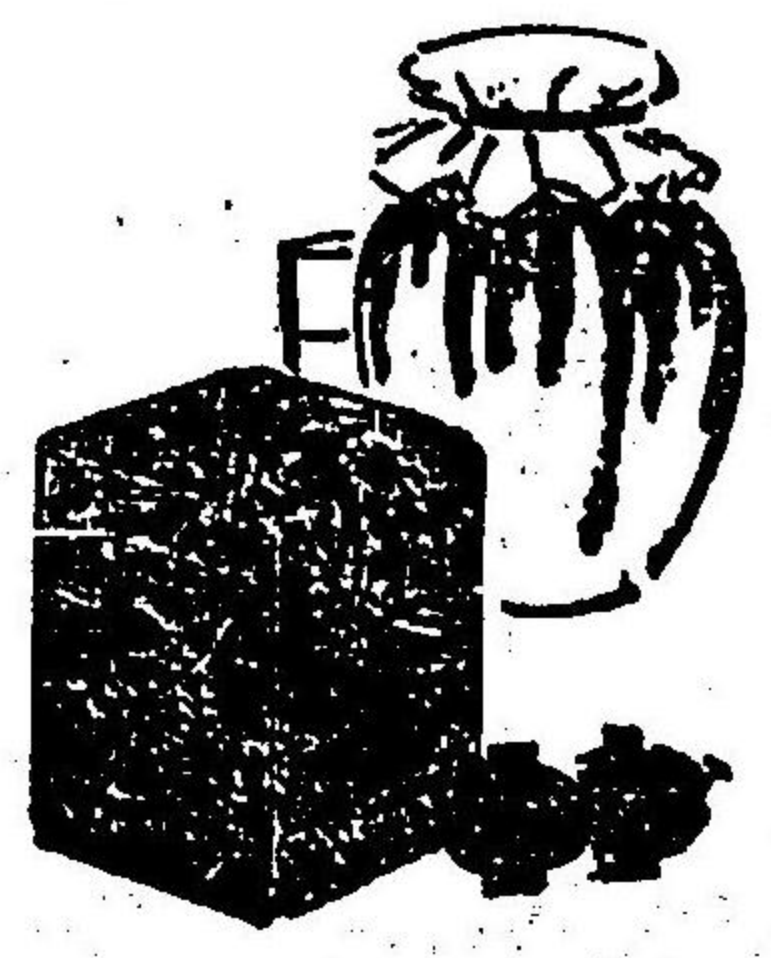


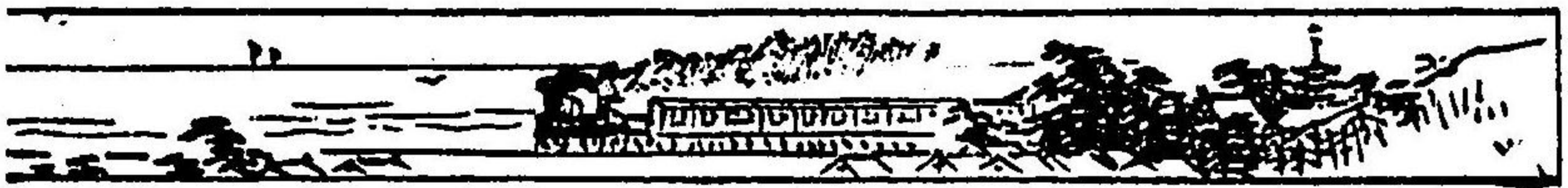
は、又、正面に見え、前は海で、三保松原もあ
 きらかに見えて、實に日本一のけしきで
 ある。興津には海水浴場があり、江尻は、
 清水港に近く、清水港は、三保に近く、三保
 には、姿おもしろしき松がたくさん生えて
 をって、けしきよく、天女があまくだて遊んだ
 こいふ、昔話のあるところである。江尻と
 静岡との南海岸に、久能山と
 いふ山がある、ここは、一時徳
 川家康を葬つたところで
 ある。

もあつた。ここは、昔徳
 川家康が隠居をして
 歩兵第三十四聯隊
 がある。



川家康が隠居をして
 をつたところで、徳川氏
 が天下をとつてから、手
 柄のあつた武士に、國中の士
 地をわけあたへ、それぞれ
 そのところを治めさせたが、こ
 の駿河の
 國は、たれ
 にもあたへず、
 自分の領分
 地としてつたか
 ら、したがつて、

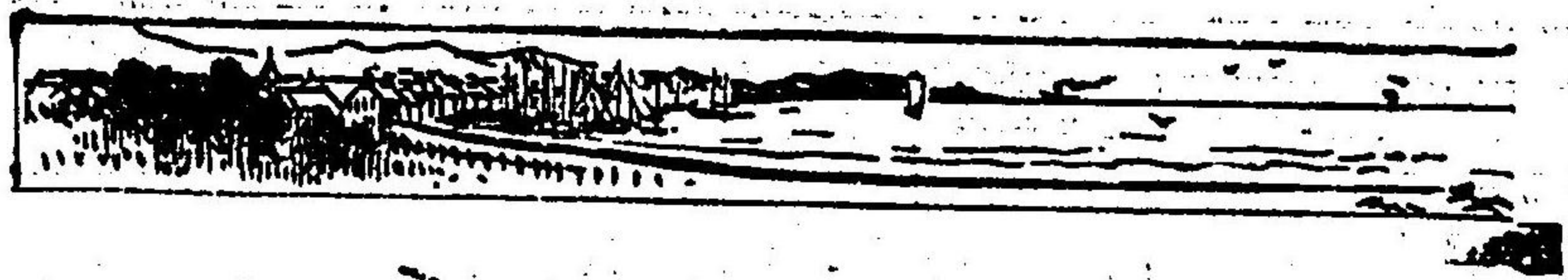




この靜岡もよほど盛大な土地であったが今はさほどともなく、人口も五萬たらずしかない。漆器と茶はこの縣の名産で、茶の多いことは、日本一である。靜岡の西に、安倍川が流れてをり、そのまた西に、焼津といふところがある、安倍川は、徳川家康が子供のころ、この川原での石合戦に、人数の少ないほうへいって見物したといふ話で、名高く、焼津は、日本武尊が、東夷を征伐なさるとき、ここで、夷のために火攻めにあ



ひなされうとしたところである。尊が、ここまでおい



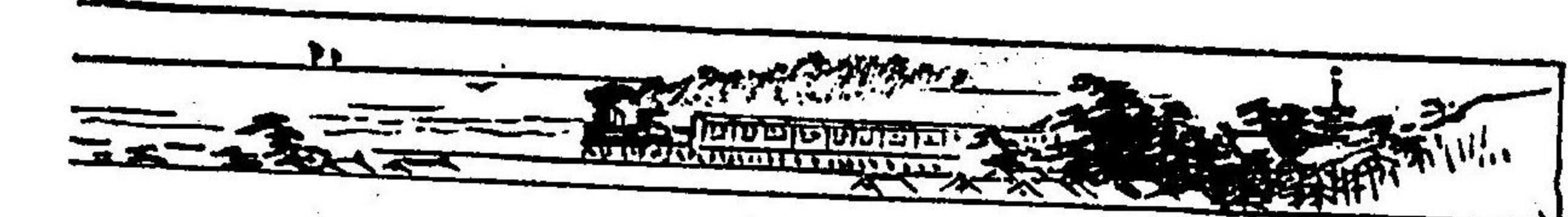
でになったとき、夷は尊をたばかって四方の草原へいちどきに火をつけ、尊をやりこころさうとした。尊はびっくり、いちじはおこまりなされたが、やがて、腰の火打袋をとり出し、こちらからも火をつき、叢雲の劍をぬいて、草をきりはらはれたら、不思議や風さかにおこって、かへって夷をやきこころした。これから、この劍を草薙の劍といふことになり、今、熱田の神宮にまつてある。有名なる大井川は、焼津の西にある。此川も富士川と同じく、幅廣く、昔は、橋

がなかったから、ここをわたるには、輦臺
といふものにのり雲助といふ人夫の
肩でわたったのである。それゆゑ、雨が
ふり、大水が出る、川止めといつて、水の
ひくまで往來がごままり、大に不便であ
つたのである。今は世もひらけて、鐵橋
ができて、汽車で往來するのであるから、
雨がふらうが、水が出やうが、なんのさ
はりもなく、安全にゆきかふことがで
きる。

八。濱名湖



大井川をわたり、遠江の國に入り、小夜の中山のトンネ
ルを通り、堀内、掛川、袋井、中泉、天龍川の諸驛をすく。天
龍川は、ここにあって、北信濃の諏訪湖から流れきたり、遠
江灘にそそぐ。この川も大井川におこらぬほどの大
川で、昔は輦臺でわたったことも、川止めがあつたことも、同
じことである。ここをもわたり越し、やがて濱松につ
く。濱松は、人口二萬の小都會、濱松の北二里に有名な
古戰場、三方原といふがある。足利氏の末徳川家康
は、この地方に居り、武田信玄は、甲斐に居つたが、信玄は、兵
をひきつれ、この國にきて、尙進んで三河の國にはいら
うとした。はいられては大へん、家康は、織田信長に加
勢をたのみ、三方原で出あうて、大戦争となった。家康は、



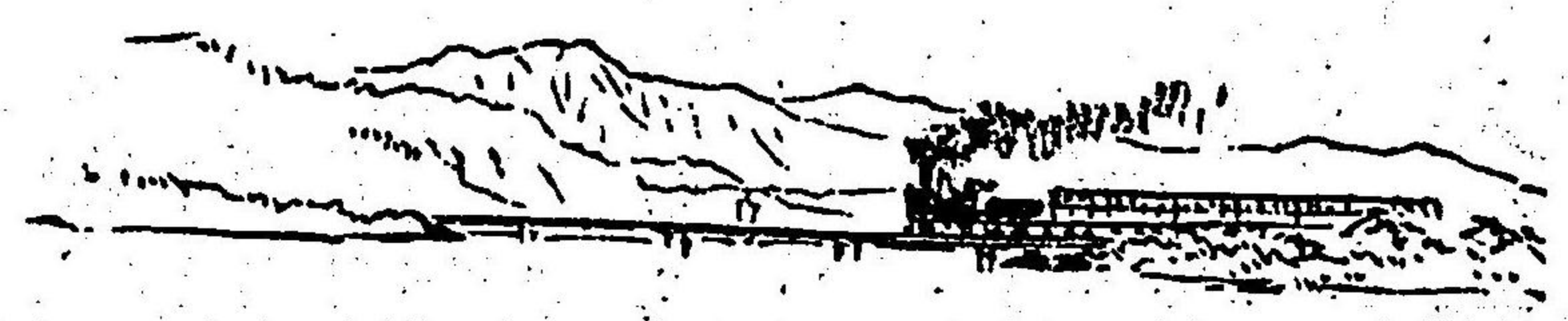
音に名高い大將ではあるが、信玄にはかなひがたく、さんざんにうちまけて、濱松城へ逃げこんで、やうやうに助かった。しかし、この戦に、信玄は大怪我をし、それがために、終に死んでしまったのは、家康にとつて、大へんなしあはせである。三方原の西に、濱名湖といつて、周圍四十里ばかりの湖水がある。この湖水は、昔は、ほんこの湖水で、水も鹽水ではなかったが、四百年ほど以前に、東海道に大地震があつたとき、海に近い岸がくづれおちて、今は、海と一つづきになっている。ここを今切といつて、今は、

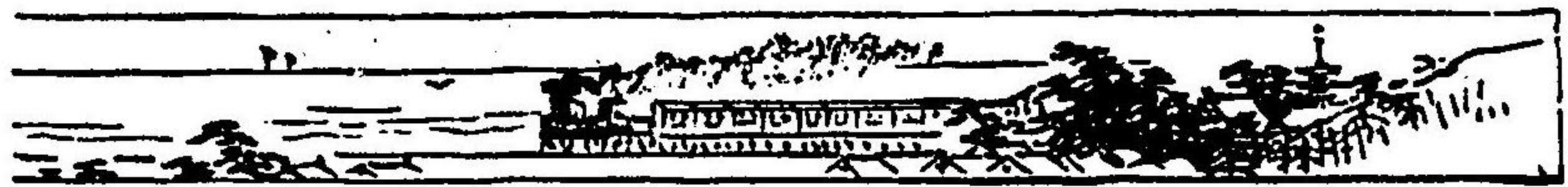


汽車が通つてゐる、北には濱名湖をうけ、南には遠江灘をひかへて、けしきまことによく、富士についての絶景である。

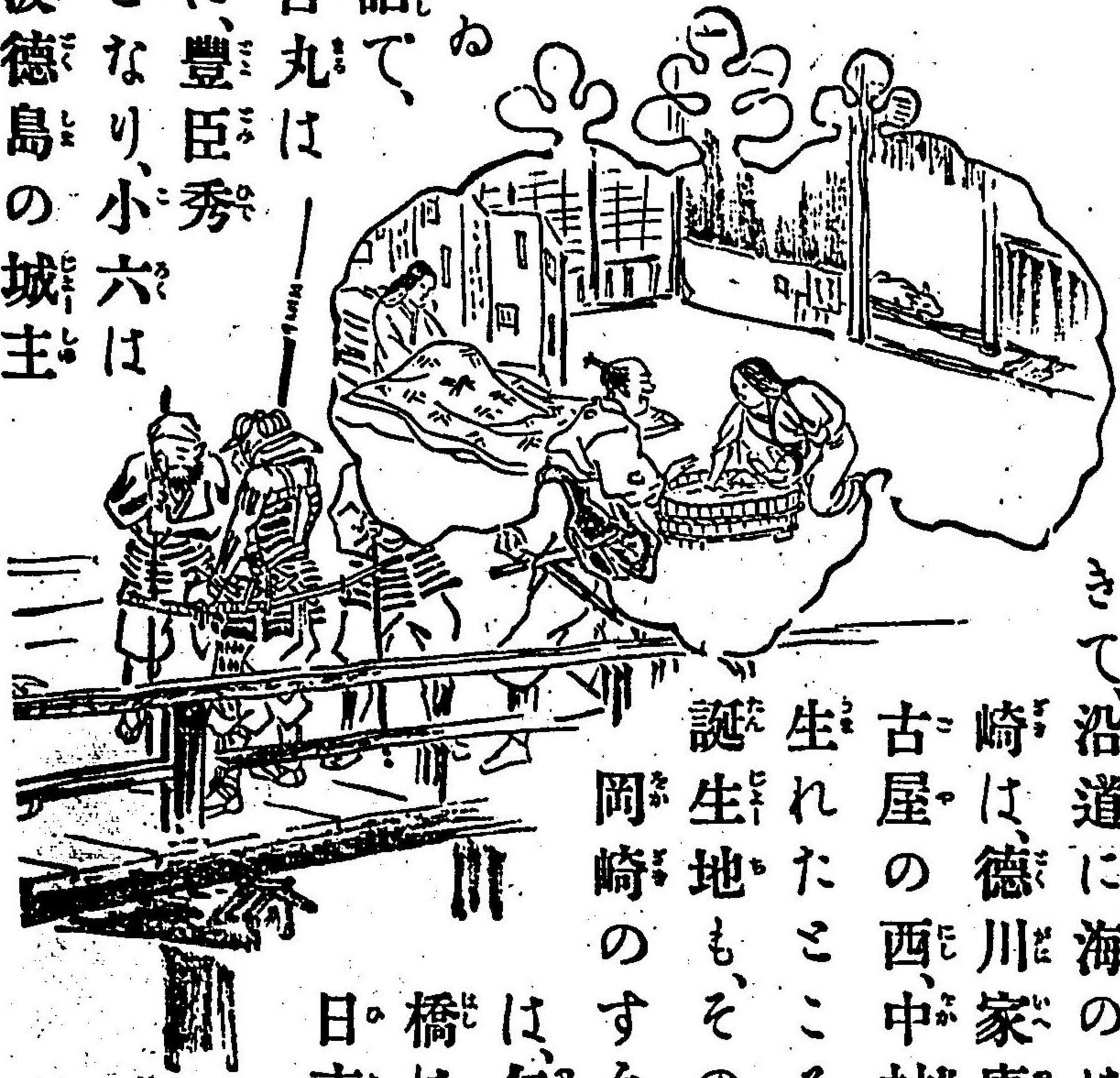
九。名古屋

汽車、三河路に入り、豊橋驛につく。ここには、歩兵第十八聯隊があり、豊橋の北二里に、豊川稻荷といふがあつて、信仰者が非常に多く、ために、汽車も出来てゐる。蒲郡といふは、渥美灣の岸にあつて、けしきよし。東海道線では、ここより西、神戸の東まで、百七十哩ほどの間、近江の琵琶湖をのぞ





＊てぬ
る話で、
日吉丸は
後に、豊臣秀
吉となり、小六は
阿波徳島の城主



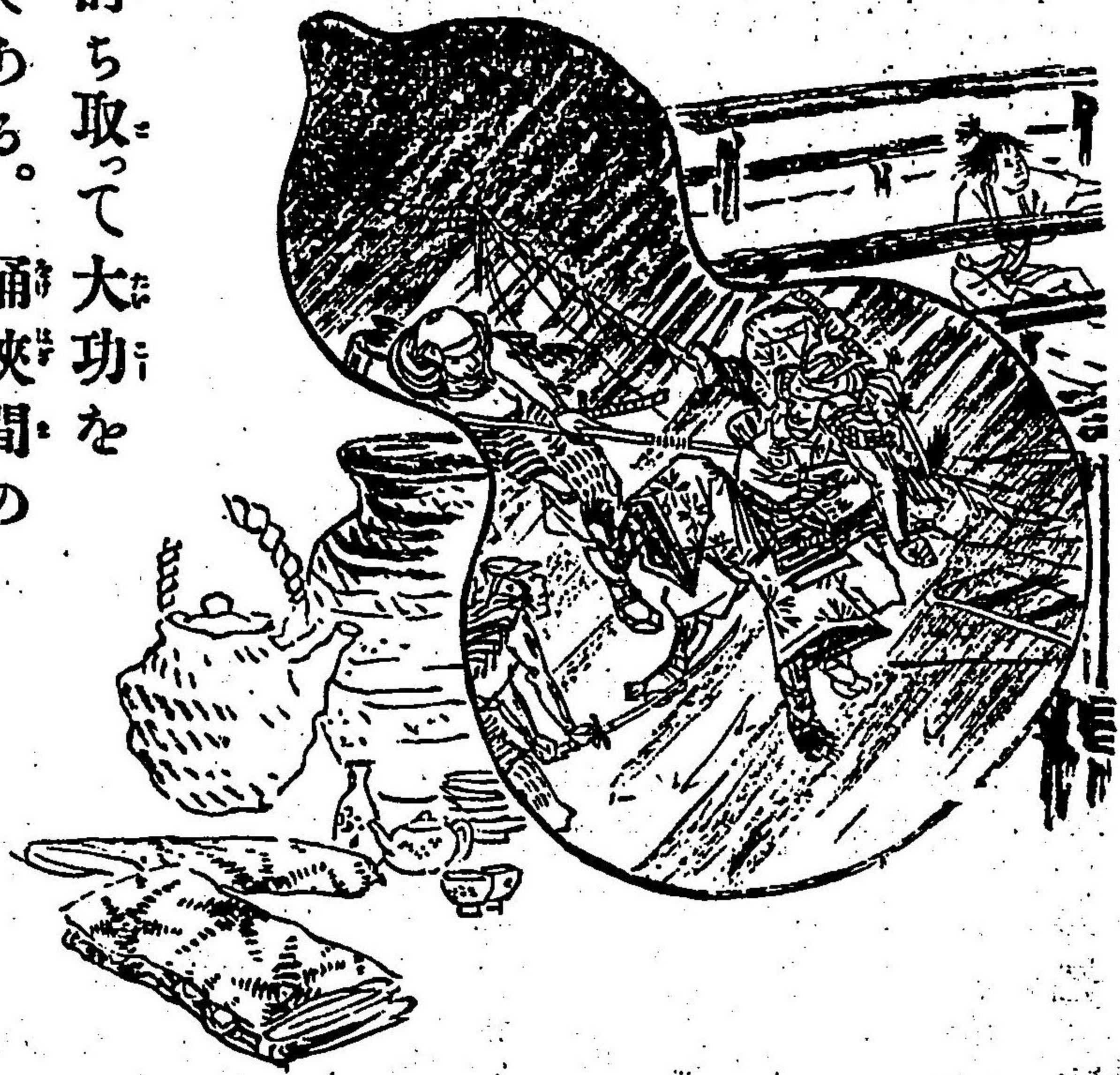
きて、沿道に海のけしきなし。岡

崎は徳川家康誕生の地で、名
古屋の西、中村は豊臣秀吉の
生れたところ。加藤清正の
誕生地も、その近べんである。
岡崎のすぐ西に流るる川

は、矢矧川、かかれる
橋は矢矧橋、ここに、
日吉丸が寝てをって、
蜂須賀小六に
出あつたことは、
よく人の知つ＊



こなつた。知多半
島の南端には、頼
朝の父、義朝が殺
された、内海とい
ふところがあり、
大府驛の北には、
桶狭間の古戦場
がある。桶狭間
は、今川義元と織
田信長との戦に、
豊臣秀吉が義元を討ち取って大功を
あらはしたところである。桶狭間の



北鳴海には、鳴海絞ができて、瀬戸と常滑には、やきものができる。

熱田は、名古屋の南町つづきにある。伊勢内海の北の



はしにあたる港であるが、水底が浅いので、大船ははいる

ここがてきぬ。神社

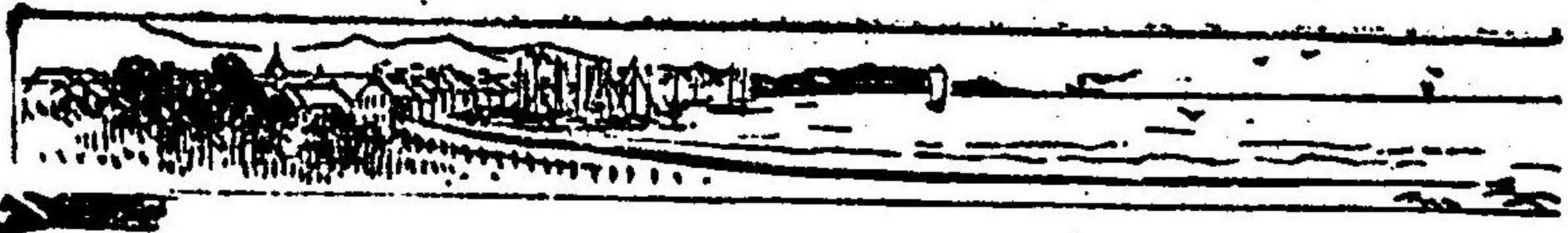
宮は、官幣大社、草薙の剣をまつる。社殿は、伊勢大廟と

同じく、すべて、白木造りで、大木生ひ茂り、神籬をここに

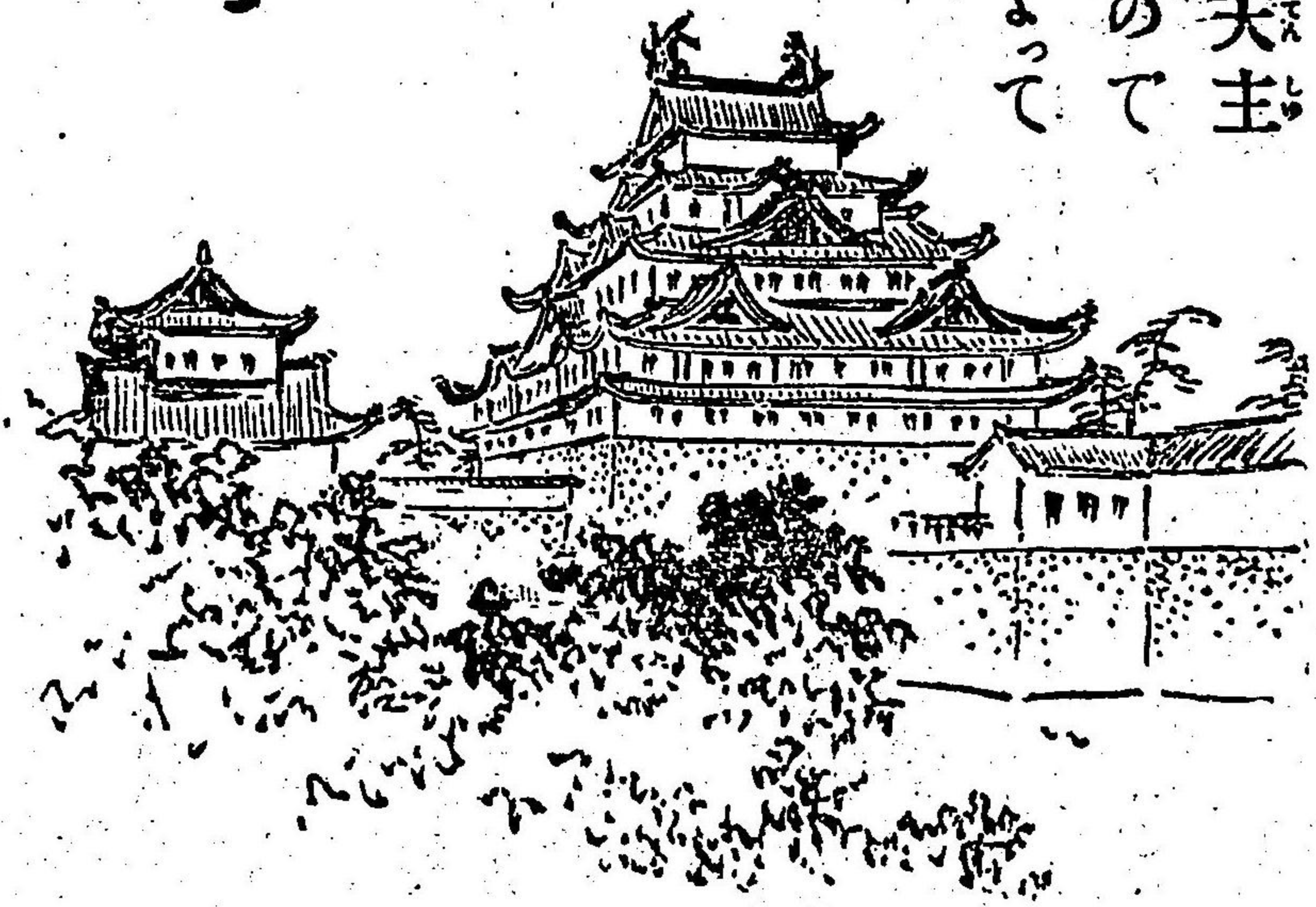
に鳴きて、いかにも、かうがうしいかまへてある。

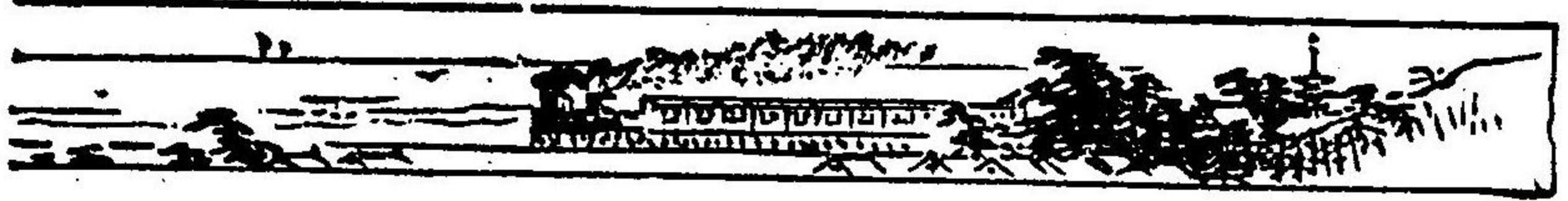
名古屋で名高いのは、城である。この城は、徳川家康が、

北國と西國との大大名にいひつけて、こしらへさせた



もので、金の鯨鋒がのってゐる天主閣は、加藤清正がこしらへたのである。鯨鋒は、閣が高いから、近よって見ても、誠に、小さく見えるが、高さ八尺五寸、胴のまはり七尺三寸あって、黄金一千九百四十枚をこかせてつくったものである。このことである。維新後、一





度、この競鋒をおろして、博覽會などに出品したところがあるが、今は又もこの通上にのせ、閑は離宮となつてゐる。名古屋には、第三師團の司令部があり、地方幼年學校もおかれてあり、工業は、すこぶる盛で、木綿、絹、陶器、漆器、七寶、焼扇などを製出する。また、四方の大平野には、農産物もあまたでき、ここに、この地は、東京と大阪との中央にあつて、中央鐵道、關西鐵道の起點にもあたり、交通極めて便利であるから、人口のふえることはおどろくばかりで、明治二十五六年頃に、十五萬であつたものが、今は、二十六萬からになつてゐる。市内には、はやくから、電氣鐵道がしかれ、自動車もあり、物價もよほどやすいから、この後、まだまだ繁昌するであらう。



さて、ここで中央線にのりかふれば、東北、木曾のほへへ行かれ、また、關西線にのりかふれば、伊勢、大和のほへへ行くことができ、いづれにも、いろいろ見るものがあるが、やはり、東海道線をますますに進み、京都、大阪のほへへ行くこととせう。しかし、新橋よりここまで、二百三十三哩、わきみちへもはいり、よほど、くだぶれたから、ここで一ぶくし、あさは編をかへて、ゆるゆる見物することとせう。

第一編 をはり

明治卅九年三月十二日印刷

明治卅九年三月十八日發行

（流車の旅第一編）

定價金八錢

不許複製

著者 清水貞雄

發行者 清水幾之助

京都市上京區二條通河原町東入二十番戶

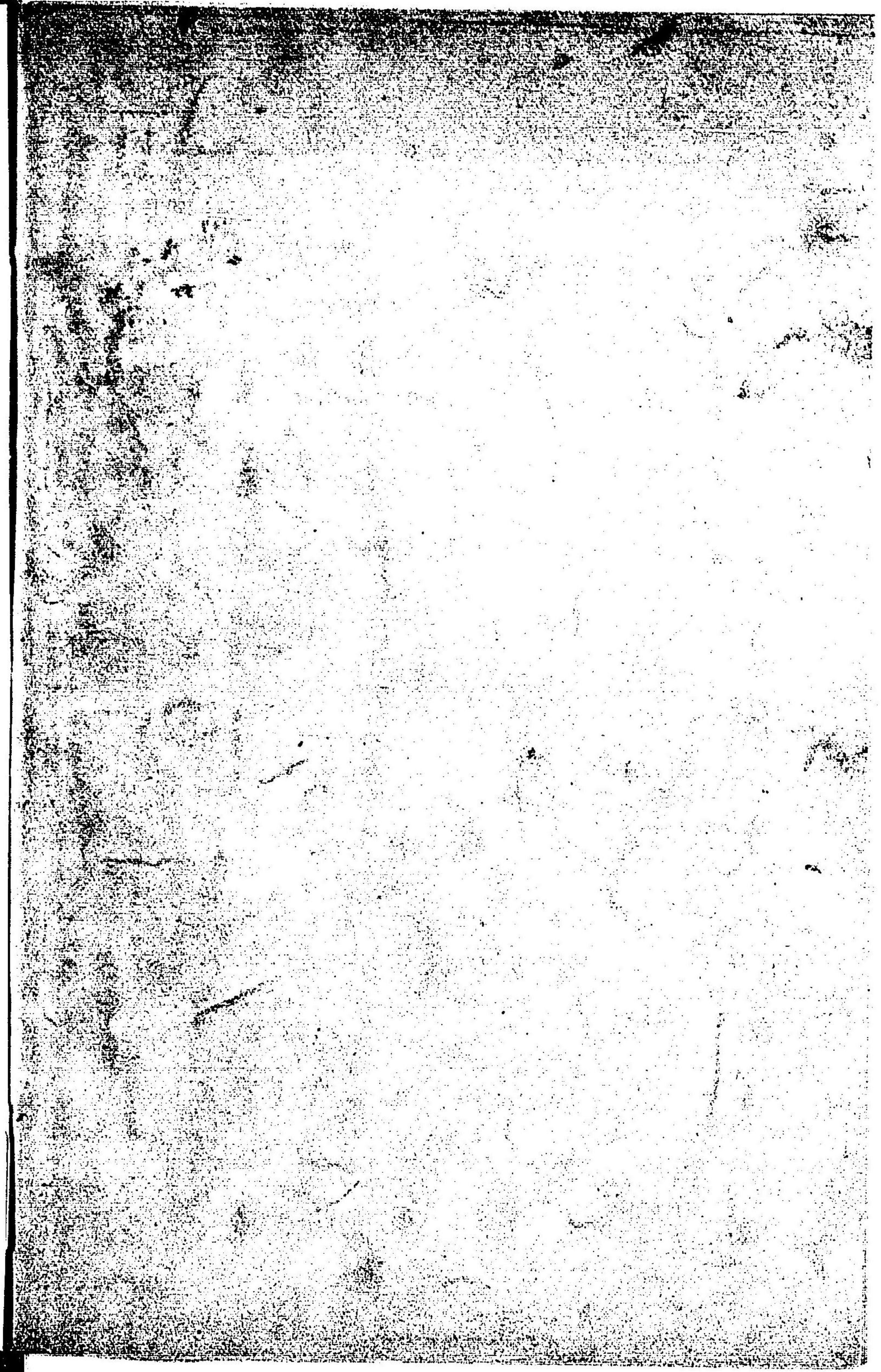
印刷者 梶原謙吉

大阪市南區東新瓦屋町貳百廿六番邸

發行所

大阪市東區備後町四丁目
京都市二條通河原町東入

寶文館



特46

78

汽車の旅

第一編

国立国会図書館

022434-001-8

特46-78

汽車の旅(家庭教育)第1, 2編

清水 貞雄/著

M39

ADB-0084

